

真坂人形

真坂人形



9784600002831

ISBN978-4-600-00283-1

C0071 ¥800E



1920071008004

玩具人形製造販売

精巧
精緻



愛嬌
満載

マサカ商店

真坂人形の話

「唐突ですが、現在僕は土人形を作っています」

SNSでそう告白したのが、2016年11月10日。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻の授業で、生まれ育った土地に伝わる八橋人形をリサーチしたのをきっかけに、日本画から土人形へ、平面から立体へ。一大転機なのかと思いきや、飄々と、でも黙々と、粘土と言葉をこねてひねって、作ること3年、およそ200種類。というのは、秋田公立美術大学卒業生シリーズとして本展を開催するにあたり、ようやく数え上げた数字である。作り始めてからの記録はなく、実物もなく。夜な夜な生み出されては誰かのもとへと嫁ぐ人形を記録しようと企画した本展は、真坂人形初めての見本市、もとい展覧会である。

この3年の歩みと展開をたどるために、散逸する真坂人形の行方を追い、一覽を作成した。所在は分かるが所有者と連絡が取れなかったもの、一度は世に出たものの人形師自身が満足できず収録がかなわなかったものも多数ある。誕生からの軌跡をただただ記録することで、何が見えるのか。販売することなくギャラリーにただただ並べた真坂人形は、どう見えるのか。真坂人形はどこから来て、真坂人形は何者で、そしてどこへ行くのか。愛でながら、ツツコミながら、にやけながらご高覧ください。



目次

はじめに 2

目次 4

真坂人形事始め 6

真坂人形とその周辺 14

先生、「真坂人形」ってなんですか？ 20

真坂人形とその周辺
まさかの「種」と「育て方」 26

真坂人形とその周辺
「土地」と「ゆるさ」の必然性 36

たのしいこと 46

真坂人形一覧 48



真坂人形事始め

彼が大学3年^{*1}の時だったかな。八橋人形^{*2}の制作体験に数回来て、作り方はひと通り体験したと思う。忙しい時に、手伝ってもらったこともあった。美大生だっというからじゃあ描けるだろうと思って絵付けをお願いしたことがあったんだ。天神様の台座の松の木、この伝統的な絵柄を彼に試しに描いてもらっただけけど、描き直してもらったよ。彼は八橋人形の会員になりたがっていたけれど、「まずは就職優先」と言っただ断った。私が教えたことはほとんどなくて、何をすることも、とにかく就職してからだという話をしたくらいかな。

松下^{*3}でやった卒展は、ピンとこなかったなあ。独りよがりというか、あまりいいとは思わなかった。その1年後にココラボ^{*4}でやるっというから見に行ったら、これはなかなか良かった。学生時代の仲間もたくさん来ていて、結構売れていましたよ。あの時は私は干支のイノシシ^{*5}を買ったんだ。足の先と尻尾を湾曲させて、底を平らに切っただ。あそこまで湾曲させるなら、底を丸くして揺れるようにすれば、もっと面白い作品になったかも。

彼はアイデアがあふれ湧き出てくるようで、オリジナル性はあるけれど、こういうとほけた表情ばかりでいいのか。郷土人形ファンをも惹き付けていくことはできるの

か。それは課題として、あると思う。この世界というのは、5年やるとうまく自分のスタイルが見えてきて、味が出てくる。この作品はあの人のものだと、分かるようになってくる。

ああ、この狛犬^{*6}はいいね。でも白眼は良くない。ちよんつとでも目を入れると、人形は全然違ってくるよね。でも彼のは面白いから、彼独自の感性を生かしていければいいね。手作りの素朴さというのが、今、日本の文化から失われようとしている。機械で作っても、面白くはない。もう一度、手作りの味わいを大切に思うファンが多く出てくるような、そんな世界を目指しているんだけれども。

彼はいろいろな人形を勉強して、いろいろな作家たちの話を聞いて、たくさんのごとを吸収して作っていると思うけれども、それが自己満足ではいけない。他の人が見ても納得するものなのか、反応を見ていけないと独りよがりになる。2000年間愛されてきた八橋人形も、時代によって変わってきた。これからも変わっていく。真坂くんにも、そういう感覚を持ってもらえたらいいかな。

梅津秀（八橋人形伝承の会）

*1 秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻の授業で、真坂は生まれ育った八橋地区に伝わる八橋人形をリサーチした。3年次の夏頃のこと。

*2 八橋人形は江戸時代の安永(天明)772(89)年頃京都伏見の人形師が伝え、秋田市の八橋地区を中心に作られた土人形。八橋地区には天神信仰の善原神社があり、お祭りの際には天神様の人形がたくさん売られたという。(参考：八橋人形伝承の会ウエブ)

*3 秋田市千秋公園内の旧割烹松下をリノベーションしたあきた文化産業施設松下。秋田公立美術大学卒業研究作品展2018の会場のひとつ。

*4 秋田市大町の川尻中央ビル1階にあるアトスベース。

*5 イノシシ(28頁)

*6 狛犬・あ、狛犬うん(9頁)

梅津秀

1949年、象潟町(現にかほ市)生まれ。東京造形大学映像学科卒業後、秋田魁新報社入社。写真部、構想支局、大館支局、鹿角支局、文化部等。2015年「八橋人形伝承の会」を発足し、会長に就任。



これは作者お気に入りの福助。



10. にわとり(赤)
11. にわとり(黄)
12.13. 狛犬・あ、狛犬・うん

7. 福助(黄)
8. にわとり(白)
9. にわとり(緑)



人形づくりの最初を見ていた人形。



4. 天神様(緑)
5. 福助(紫)
6. 福助(青)

1. 天神様(青)
2. 天神様(黄)
3. 天神様(黄)



中に人がいることをお忘れなく。



無事に帰る、に音が通ずる縁起物。



猿は「魔が去る」。
桃は不老長寿の象徴です。

- 23. 狐
- 24. 頭の大きな福助
- 25. 犬

- 20. ふ尽しの福助
- 21. 獅子舞
- 22. ふくろう

- 17. 鯉抱き童子
- 18. 武士にカエル
- 19. ふく助

- 14. ミミズク
- 15. タヌキ
- 16. 桃抱き猿



35.36. 波、波



まだ咲かない蓮の花を持った白衣観音。

33. お釈迦様
34. 観音様



29. 鯛
30. ツル
31.32. 松、松



こんなに飛び出たら飲めないよね。

26. お亀(赤)
27. お亀(グレー)
28. 茶柱

真坂人形とその周辺

秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻において、2016年に誕生して以来、秋田市内のスタジオや自宅で制作が続けられている真坂人形。型抜きと手びねりで作られたこれまでの作品は、スタジオにあるコンテナや段ボール箱、購入者宅などで実物を確認できたものがおよそ170種類。話には聞かぬが所在が分からないものや、世に出たものの造形や表情に真坂自身が満足できず収録できなかったものが十数種類。そのほか、SNS^{*1}によって写真だけ確認できた作品もあり、色違いやサイズ違いを合わせれば200種類は優に超える。この1年半は、会社員として働きながらの制作活動であったことからすれば、驚異的な数字だ。

真坂人形は、生まれ育った八橋地区に伝わる八橋人形をリサーチするなかで生まれた。八橋人形の文献はもとより、各地に伝わる土人形の古い書物を読み漁り、東京の今戸^{*2}、京都の伏見人形^{*3}などを訪れては弟子入りを志願し、断られながらもリサーチを重ね、土人形を作ることへの「確信」を深めていった。当時指導した山本太郎^{*4}は、「土人形は時代によって作られる種類が違い、職人によって造形も違う。過去の文献を調べること、彼は、昔の方が表現は自由だったのだと感じ取ったのではないか。各地でリサーチをすることで、オリジナルの人形を生み出す自分の表現が裏付けられていった」と振り返る。

真坂人形は、「日頃の些細な出来事を種としている」と真坂は言う。日常感あふれる、いわゆる「ゆるい」表情が持ち味だが、「ゆるさがゆるされる。その感じが真坂人形である」と藤浩志^{*5}は評する。ゆるいだけでなく、それがゆるされるゆらさであることは、真坂が目指す「少し変わっていて、ほっとけない」印象を醸し出す。それが次々と生み出されては買い求められていく、真坂人形の魅力である。当時の様子を見ていた尾花賢一^{*6}は、「真坂人形は彼のルールでどんどん未来へ向かっていった」と話す。

特筆すべきは、真坂人形と購入者との関係である。本展覧会を開催するにあたり、真坂人形を借用させていただいた方々のなかには、「私を守ってくれているの」「うちの神棚にいるよ」「私の『くま^{*7}』は、私の代わりに困ったことを引き受けてくれる。だから私の守り神」と教えてくれる。福永竜也^{*8}はこう語る。「わが家の真坂人形『福永さん^{*9}』は、台所の守り神として鎮座している。それは私が仕事に出た後、妻にとって寂しい空間になってしまう私の勝手な思いやりからスタートした。何度、流しに落ちてきたことか。これからも家族を守り、わが子の成長を見守ってくれる存在になるだろう」とほけた表情であっても、ゆるいトーンであっても、それがダジャレであったとしても、真坂人形は疑いなく縁起物なのである。(26頁へつづく)

*1 https://www.instagram.com/ajum_unisstack/
<https://mesakuninryo.hokusei.ac.jp/>

*2 江戸時代から明治時代を中心に、東京都台東区の今戸やその周辺で製造販売された焼き物。

*3 江戸時代後期に最盛期を迎えた最も古い郷土玩具。

*4 日本の古典絵画に現代を融合させた「ニッポン画」を提唱するニッポン画家。2018年まで秋田公立美術大学准教授。現在、京都造形芸術大学准教授。

*5 地域社会をフィールドに表現活動を展開する美術作家。十和田市現代美術館館長等を経て、秋田公立美術大学大学院総合芸術研究科教授。

*6 覆面男の木彫や絵画等が特徴のアーティスト。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻助手。

*7 くま^{(2)頁}

*8 石彫やインスタレーションを専門とする美術家。2013年から2018年まで秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻助手。

*9 福永さん(21頁)



人気も出ませんが・・・。

大根は煮ても焼いても悪いものには当たりません。



46. 招き猫

43. 大根
44.45. 狛犬・あ、狛犬・うん



豆腐に見える人は心の清い人です。



40. エビス様
41. 猩猩
42. 猩猩

37. 豆腐
38. 護摩豆腐
39. 福助

万の宝でマンボウ。



相撲の最高位、横綱。
全盛期の面影を残します。

でも我慢できそうにない。



見ない聞かない言わない、



55. マンボウ
56.57.58. 三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)
59.60.61. 三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)

52. 山カメ
53. 龍
54. 鳳凰

51. 麒麟

47. 横綱
48.49.50. 蓬萊山、岩、岩

先生、「真坂人形」ってなんですか？

真

坂くんは山本太郎さんとの出会いによって、技術を習得するだけでなく、ポップで現代美術的なアプローチの仕方を身に付けていったと思います。教員と助手が彼の表現に対して、「それ面白いじゃん」と積極的なムードを作り、彼はそのなかで制作場所を確保して表現していった。教員・助手総動員のようでありながら野放しでもあったなかで、うまく展開していったと思います。

彼は真面目だけれど、適度に不真面目だったのが良かったのではないのでしょうか。八橋人形の伝統を守ろうとするのではなく、好奇心をポップに展開していった。郷土人形の文脈から出てきたのではなく、よそ者としてずらすことができた。これらが噛み合せて化学反応が起き、リサーチと挑戦を続けて自分のフィールドを立ち上げていったんです。執着という愛でも、独占という愛でもない、ものへのインティマシー（親密さ）。可愛らしい近さが自分の持ち味であることを、彼は分かっていると思います。（石倉敏明）

不思議な立ち位置ですよ。ね。



67. 尾花さん 63. 石倉さん 66. 服部さん

真坂人形には、陰がない……。

インティマシー。

美

術作品と工芸品、作品と商品、無名と有名など、いろいろなもののはざまの不思議な立ち位置にある真坂人形。この3年間に制作され、さまざまな人の手に渡った人形が集まると、どんな景色が見えるのでしょうか。真坂人形は今後も続くのか。彼が何を目指すのか、とても気になりますね。（服部浩之）

人

形って何か、陰を背負っちゃうところがあるじゃないですか。でも真坂人形には陰がない。切迫したものが無い。作って、喜ばれて、所有されて。その状況が嬉しいはずだし、幸せだなと思いますね。

彼は平面から立体に転向しましたが、それは大きなジャンプとして挑んだものではないかもしれませんが、むしろそんな気負いがなかったからこそ、超えられた。平面の延長に人形があって、それは彼にとってコントロールしやすいものだったんでしょう。真坂人形は日本画からも、工芸からも生まれなかったはず。そのはざまにある専攻だからこそ、真坂人形が生まれたんだと思います。（尾花賢一）

作

るのが好きなのだろうけれど、それは別に、彼は振る舞いが面白かったよね。テキストもいいし、プレゼンテーションの仕方の展示の仕方も良かった。数がまだ少なすぎてあまり説得力がなかった時に、マサカ商店という屋号にしたり暖簾を作ったり、前掛けを着けたりして、最初から結構ブレずにやっていったと思う。表情に対して食欲なのもいい。したたかに売っていきたい欲望もある。何より彼は、僕が知っている卒業生の誰よりも制作している人。真坂人形作りにはまり込んでいるから、今後さらに展開する可能性はあるね。（藤浩志）

彼

は、いいキャラだと思いますよ。威圧的ではなく、ギラギラせず、欲望もない。それらを秘めているのかどうかも分からない。人形としての完成度があるのかということ、それはまだ途上なんだけれど。頂上を目指そうと思わずに、山のすそ野をあちこち楽しんでいくのがいい。だからこそ、ラクに見られる、愛される。真坂のキャラクターと同じで、つかみどころがないっていうのがいいところなんじゃないかな。（皆川嘉博）

ひょいっと、超えました。

振る舞いが面白かったよね。

彼は、いいキャラですよ。



64. 山本さん 65. 皆川さん 62. 藤さん 68. 福永さん

人形の本質を突いているんです。

肩

肘を張らない人柄で、それは作風からも見て取れます。いい意味でのキツキツ感、見る人に笑いと和みを与えてくれる。そのゆるさの感覚は、秋田で生まれ育ったことやアーツ&ルーツ専攻で培ってきたものでしょう。ジャンルの垣根をひょいっと超えて、これからも多様な真坂人形を産み出し続けるんだろうなあ。（福永竜也）

真

坂くんは、秋美の授業の申し子のような存在。僕たち教員がやろうとしていたことをうまく汲み取って、面白い活動に落とし込んでくれたと思います。リサーチ的な手法は石倉さん、技術的な面では皆川さん、ゆるく遊びつばい感覚は藤さんというように、最終的にみんなの影響を自分の中で吸収して、咀嚼して、自分の表現に持っていたと思います。

真坂人形の何がいいかということ、人から欲しがられることでしょうか。愛されるべきものであるのが、人形の本質。彼は愛されるもの、欲しいと思ってもらえるものを敏感に捉えて表現している。真坂人形は、人形が果たすべき役割をしっかりと果たしているんです。（山本太郎）



置けば福来て置かずば損々
 枱で益々福が増々。



80.81.82. 三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)
 83.84. 狛犬・あ、狛犬・うん
 85. 枱之助

76.77. 招き猫、ネズミ
 78. カエル
 79. 福助



夏が待ち遠しい子ども。
 海は好きだが泳げない。



雨に濡れたら絵具落ちるんだけどね。

73. 浦島太郎
 74. 海パン童子
 75. くまのくま(黒)

69. 福助
 70.71. ウサギとカメ(ウサギ、カメ)
 72. 雨待ち童子



98. ミミズク



地球を調べに来たんだけど
捕まっちゃった。

95.96. 雪だるま(赤)、雪だるま(赤)後姿
97. 宇宙人



分銅さんに「重い」は禁句。



91.92. 分銅くん、分銅さん
93. サンタさん
94. 雪だるま(青)



定規の目盛りの読み間違え、
線の引き損ないはアマノジャクのいたすら。



しかしそこは目分量。あくまでも大体である。

超人的な目分量で重さ、容量、面積をはかるが

86. アマノジャク
87. ハカリ
88.89.90. 目分量マスク(m・cm・ml)

真坂人形とその周辺

まさかの「種」と「育て方」

日頃の発想をノートにスケッチする真坂は、描いたものから、さらに別のものへと展開させていくのが速い。描いた対象に服を着せてみる。脱がせてみる。立たせてみる。寝せてみる。何かと一体化させてみる…と、自由自在だ。それがやがて手元で形作られ、手のひらサイズの立体として立ち現れる。粘土という自由な素材と手中でコントロールできるサイズ感、真坂の発想や発想を崩していくスピード感と合致するのだろう。

題材は、福助、狛犬、干支、天神様、ふくろう、ツル、カメ、鯛から松や波、果ては豆腐（十富）や茶柱、マンボウ（万宝）まで。言葉遊びを巧みに用い、悠然と作り出す真坂人形は注目を集めた。大学卒業後の真坂人形は、次第に社会と

の関わりのなかにも種を見つけていく。能代市で商店街を舞台に開かれた「まちなか美術展」では、平山はかり店の店先にあっただまさまな“はかり”を題材とした。分銅くん、分銅さん、目分量マスク、アマノジャクなど擬人化された“はかり”たちは、単体としても、集合体としても魅了する。そのほか夏のお化けたち、みかん子僧に早生みかん子僧、カツオ武士を作ればその殿様を作り、影武者も作る。ひとひねり、ふたひねり、次々と展開していく土人形は、組み合わせや角度によって見る者の顔がほら、にやけてしまう。（36頁へつづく）



平山はかり店と真坂人形

※本人は髷ではありません、念のため。眼鏡は掛けてます。



107. 豆ゾウ

105. 作者の分身
106. 豆ライオン



ネズミ年にはみ出るから急ブレイキ。



102. イノシシ(茶)
103. イノシシ(赤)
104. イノシシ(白)

プリン、富士山、豚、風船、
ふ尽くし招福お任せあれ。



99. ふ尽しの福助(黄)
100. ふ尽しの福助(青)
101. ふ尽しの福助(緑)





221. くまっくマ(茶)
 222. 招き猫(白)
 223. 鬼面福助(青)

118. 子ふくろう
 119. タコ
 120. 鯉乗り童子



113. デザインヒゲだるま
 114.115.116. わさび、大根おろし、からし
 117. パッケ

108. 豆カバ
 109. 豆クマ
 110.111.112. 豆だるま、豆だるま、姫だるま



絶対に、絶対に水を入れないでください。



131. うつわモドキ・茶碗(赤)
132. うつわモドキ・湯呑み(薄灰)
133. うつわモドキ・茶碗(黄)

128. うつわモドキ・壺(青)
129. うつわモドキ・茶碗(クリーム)
130. うつわモドキ・茶碗(赤)



身を粉にして働く家来とその主人。

125. 豆腐小僧
126.127. カツオの殿様、カツオ武士

124. 鬼面福助(赤)



火事も病気も不安なことは、
フーンと何処かに飛ばしませんか。



火除けのお守り。
漏らしたけど許してね。



君は一体だれ？



- 140. カッパ
- 141. おもしろくん
- 142. シーツお化け(黒)

- 137. フーフーだるま
- 138. 招き猫(黒)
- 139. ユーレイ



トントン大相撲の力士。
遊んでもらって彼らは強くなる。

136. トントン力士(金)

134. うつわモドキ・壺(空色)
135. トントン力士

「土地」と「ゆるさ」の必然性

誕生から2年ほどは手ひねりだった真坂人形だが、やがて、求められる数を思うように生み出せないジレンマに直面する。石膏の合わせ型を取り入れるようになったのは、2018年の後半からだ。型による成形に慣れてくると、胴体は型抜きとし、手足は手ひねりする。など手法にバリエーションが生まれていった。800℃で一晩ゆっくり素焼きした後、日本画に用いる胡粉を塗り重ね、水干絵具で絵付けする。訪れた京都の絵具屋の店主に、「うちの水干絵具を人形に使ったら、贅沢やね」と言わしめたその絵具を使って描くのだ。

伝統的な土人形作りと、あふれ出る発想によって生み出される真坂人形。そこには200年間愛されてきた八橋人形を源流とする土地の必



然性があり、秋田という「ゆるい」土地柄ののんびり感や面白さまで見えてくる。

藤は真坂人形について、「現代美術とも、彫刻、工芸とも言わせない『何だろうね』という新しい在り方」と語る。真坂自身、自分はアートでもクラフトでもなく、人形を作るのは「ただただ面白いものが見たいから」と言っ

時には自分で作った人形と一緒に笑い、その表情を褒めておだてながら、ツツコミながら、にやけながら制作する真坂。面白いものへの一途さが真坂人形であり、それが作ることの原動力なのかもしれない。(高橋ともみ)





149. ススだらけのサンタさん
150. 警備員
151. イエティ



146. みかん子僧
147. 早生みかん子僧
148. 獅子舞



144. シーツお化け・裸足
145. たこけし

143. シーツお化け(緑)



モチモチした月の餅を使って地球侵略を目論む。
ボンディングを研究中。



皆様おはちゅーにお目にかかります。
あつしねずみ小僧とマウスです。



158. 月のウサギ
159. メンインブラック
160. ねずみ小僧(緑)

155. 武士にカエル(金)
156. 武士にカエル(青)
157. 武士にカエル(赤)



足サイズ5cmのビッグフット。



154. 武士にカエル(黒)

152. ビッグフット
153. 武士にカエル(赤)



誰もあの恐竜だなんて思わないでしょう。

169. ○ッシー(青)
170. カエル
171. 福助(赤)

166. タヌキ(茶)
167. タヌキ(緑)
168. ○ッシー(赤)



寝転ぶ富士山。
鷹っぽくない鷹。
ブリッジする茄子。

165. 鏡餅マン

161. ねずみ小僧(黄緑)
162.163.164. 一富士、二鷹、三茄子



困ったクマ。
クマにも困ることがある。

176. くまったクマ(黒)
177. くまったクマ(黒)

175. くまったクマ(黒)



一に正座二に正座三、四がなくて五に正座。



174. 福助の師匠(青)

172. 福助の師匠(赤)
173. 福助(水色)

たのしいこと

企画の初期段階に、「真坂人形の記録をとりたい」「図録を作れたらいいよね」と言われた時はピンとこなかったんですが、

撮影して取材もしていただいて、立派な記録集ができました。

良いですね、こんなの自分じゃ作ろうともしませんから。

見れば見るほど自分が作った人形に見えないから不思議ですね。

人形作っていると、「人形好きなんですか？」って聞かれるんですけど

特別そういうわけではないです。

可愛いものは好きで買いますが、決して収集家とかではない。

作るのが楽しいんですよ。

そういうもんですから、手元に作品が残るのもあんまり好きじゃない。

できればみんなどこかへ貰われてほしい。

たまってもいちいち飾ったりしないので、それだと人形が気の毒です。

作ることもそうだけど、何よりお客さんにウケた時が楽しいです。

作って笑って、見せて笑われて。こんなにハッピーなことはないですよ。

2019年11月 真坂歩



イラスト：真坂歩

1994年秋田市生まれ。秋田県立新屋高等学校、秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。大学3年次に地元を古くから伝わる「八橋人形」をリサーチしたことをきっかけに、手びねりと型抜き技法と伝統的な彩色で土人形を作り始める。あくまでも伝統技法を主体としながら言葉遊びやゆるめの表情によって独自の世界観を形成。素朴な民芸品に、新たな価値を与えている。

No.	名前	W×H×D mm	分類	制作年	
46.	招き猫	135×220×125	手	2017	あきた文化産業施設 松下蔵
47.	横綱	120×210×80	手	2017	個人蔵
48.	蓬莱山	225×275×140	手	2017	
49.	岩	145×80×68	手	2017	
50.	岩	150×80×50	手	2017	
51.	麒麟	85×80×160	手	2017	個人蔵
52.	山カメ	145×150×120	手	2017	
53.	龍	115×210×125	手	2017	
54.	鳳凰	80×200×205	手	2017	
55.	マンボウ	70×40×110	手	2017	個人蔵
56.	三猿・見ざる(白)	45×73×38	手	2017	個人蔵
57.	三猿・聞かざる(白)	53×78×32	手	2017	個人蔵
58.	三猿・言わざる(白)	50×82×40	手	2017	個人蔵
59.	三猿・見ざる(緑)	35×80×41	手	2018	個人蔵
60.	三猿・聞かざる(緑)	53×78×32	手	2018	個人蔵
61.	三猿・言わざる(緑)	48×75×43	手	2018	個人蔵
62.	藤さん	43×70×35	手	2018	個人蔵
63.	石倉さん	32×72×30	手	2018	個人蔵
64.	山本さん	35×85×30	手	2018	個人蔵
65.	皆川さん	40×78×28	手	2018	個人蔵
66.	服部さん	32×80×32	手	2018	個人蔵
67.	尾花さん	30×75×25	手	2018	個人蔵
68.	福永さん	38×70×31	手	2018	個人蔵
69.	福助	95×105×45	手	2018	
70.	ウサギとカメ・ウサギ	140×75×46	手	2018	
71.	ウサギとカメ・カメ	70×33×57	手	2018	
72.	雨待ち童子	55×119×52	手	2018	
73.	浦島太郎	89×98×61	手	2018	
74.	海パン童子	61×112×45	手	2018	
75.	くまのママ(黒)	77×117×61	手	2018	個人蔵
76.	招き猫	78×114×72	手	2018	個人蔵
77.	ネズミ	24×41×30	手	2018	個人蔵
78.	カエル	41×58×33	手	2018	
79.	福助	66×65×43	型	2018	
80.	三猿・見ざる(白)	40×60×45	型	2018	
81.	三猿・言わざる(白)	35×56×40	型	2018	
82.	三猿・聞かざる(白)	40×60×46	型	2018	
83.	狛犬・あ	70×80×46	型	2018	
84.	狛犬・うん	70×75×50	型	2018	
85.	杵之助	81×76×55	型	2018	平山はかり店蔵
86.	アマノジャク	50×79×41	型	2018	平山はかり店蔵
87.	ハカリ	50×82×40	型	2018	平山はかり店蔵
88.	目分量マスク 立法メートル	50×82×38	型	2018	平山はかり店蔵
89.	目分量マスク センチメートル	50×82×38	型	2018	平山はかり店蔵
90.	目分量マスク ミリメートル	50×82×38	型	2018	平山はかり店蔵
91.	分銅くん	45×70×45	型	2018	平山はかり店蔵
92.	分銅さん	45×70×45	型	2018	平山はかり店蔵
93.	サンタさん	49×82×50	型	2018	
94.	雪だるま(青)	53×70×45	型	2018	
95.	雪だるま(赤)	53×70×45	型	2018	

真坂人形一覧

【素材】 粘土、水干絵具、胡粉、墨、膠を使用。※62～68は石粉粘土、水干絵具、胡粉、膠
【分類】 「手」は 手びねりによる成形、「型」は 石膏型による成形

No.	名前	W×H×D mm	分類	制作年	
1.	天神様(青)	37×72×37	手	2016	
2.	天神様(黄)	37×72×37	手	2016	
3.	天神様(黄)	42×102×40	手	2016	
4.	天神様(緑)	48×105×57	手	2016	
5.	福助(紫)	85×87×59	手	2016	
6.	福助(青)	82×87×70	手	2016	
7.	福助(黄)	97×102×59	手	2016	
8.	にわとり(白)	27×54×67	手	2016	
9.	にわとり(緑)	29×50×78	手	2016	
10.	にわとり(赤)	29×50×70	手	2016	
11.	にわとり(黄)	29×48×65	手	2016	
12.	狛犬・あ	92×81×55	手	2016	
13.	狛犬・うん	105×102×60	手	2016	
14.	ミズク	40×57×55	手	2017	個人蔵
15.	タヌキ	60×91×60	手	2017	
16.	桃抱き猿	52×127×53	手	2017	個人蔵
17.	鯉抱き童子	100×118×68	手	2017	個人蔵
18.	武士にカエル	61×91×30	手	2017	
19.	ふぐ助	110×100×100	手	2017	個人蔵
20.	ふ尽しの福助	85×100×60	手	2017	個人蔵
21.	獅子舞	90×95×70	手	2017	個人蔵
22.	ふくろう	55×90×75	手	2017	個人蔵
23.	狐	55×100×80	手	2017	個人蔵
24.	頭の大きな福助	165×195×135	手	2017	個人蔵
25.	犬	50×75×80	手	2017	
26.	お亀(赤)	50×70×55	手	2017	
27.	お亀(グレー)	50×75×60	手	2017	
28.	茶柱	75×80×73	手	2017	
29.	鯛	40×62×105	手	2017	
30.	ツル	30×85×55	手	2017	
31.	松	50×90×30	手	2017	
32.	松	68×110×40	手	2017	個人蔵
33.	お釈迦様	70×120×60	手	2017	
34.	観音様	65×190×50	手	2017	個人蔵
35.	波	110×55×28	手	2017	
36.	波	130×115×40	手	2017	
37.	豆腐	70×55×70	手	2017	
38.	護摩豆腐	80×52×60	手	2017	
39.	福助	140×135×92	手	2017	個人蔵
40.	エビス様	120×100×115	手	2017	
41.	猩猩	85×125×95	手	2017	あきた文化産業施設 松下蔵
42.	猩猩	113×140×85	手	2017	あきた文化産業施設 松下蔵
43.	大根	180×70×48	手	2017	個人蔵
44.	狛犬・あ	100×160×110	手	2017	
45.	狛犬・うん	100×170×110	手	2017	

No.	名前	W×H×D mm	分類	制作年
146.	みかん子僧	40×65×37	型	2019
147.	早生みかん子僧	45×60×40	型	2019
148.	獅子舞	40×93×45	型	2019
149.	スズだらけのサンタさん	45×88×45	型	2019
150.	警備員	72×111×42	型	2019
151.	イエティ	75×95×52	型	2019
152.	ビッグフット	75×95×52	型	2019
153.	武士にカエル(赤)	76×112×67	型	2019
154.	武士にカエル(黒)	76×112×67	型	2019
155.	武士にカエル(金)	75×110×65	型	2019
156.	武士にカエル(青)	75×110×65	型	2019
157.	武士にカエル(赤)	75×110×65	型	2019
158.	月のウサギ	47×116×50	型	2019
159.	メインブラック	68×107×45	型	2019
160.	ねずみ小僧(緑)	68×61×55	型	2019
161.	ねずみ小僧(黄緑)	68×61×55	型	2019
162.	一富士	250×90×60	手	2019
163.	二鷹	80×138×45	手	2019
164.	三茄子	50×75×126	手	2019
165.	鏡餅マン	83×113×57	型	2019
166.	タヌキ(茶)	65×96×57	型	2019
167.	タヌキ(緑)	65×96×57	型	2019
168.	○ッシー(赤)	90×78×45	型	2019
169.	○ッシー(青)	90×78×45	型	2019
170.	カエル	38×50×32	型	2019
171.	福助(赤)	98×120×60	型	2019
172.	福助の師匠(赤)	98×120×60	型	2019
173.	福助(水色)	98×120×60	型	2019
174.	福助の師匠(青)	98×120×60	型	2019
175.	くまったクマ(黒)	60×103×73	型	2019
176.	くまったクマ(黒)	60×103×80	型	2019
177.	くまったクマ(黒)	70×105×80	型	2019

展覧会記録

秋田公立美術大学卒業生シリーズ

真坂人形展

会期 | 2019年11月2日(土)～23日(土)

会場 | 秋田公立美術大学サテライトセンター(秋田市中通二丁目8-1 フォンテAKITA6階)

主催 | 秋田公立美術大学、NPO法人アーツセンターあきた

デザイン | 越後谷洋徳

協力 | 平山はかり店、あきた文化産業施設 松下

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りました皆さまに心より感謝の意を表します。

(50音順 敬称略)

虻川彩花、石倉敏明、梅津秀(八橋人形伝承の会)、大関智子、尾花賢一、加賀谷満里子、カフェ・エビス、木村優希、工藤千尋、熊谷峻、小松和彦、境田亜希、嵯峨亜希子、澁谷和之、菅原綾希子、田中里姫、田中さとみ、田村一、戸松浩之、服部浩之、パティスリー白川、平山はるみ、福永竜也、藤浩志、松橋真理子、皆川嘉博、村山留里子、山本太郎、渡辺楓和

No.	名前	W×H×D mm	分類	制作年
96.	雪だるま(赤)	53×70×45	型	2018
97.	宇宙人	45×75×49	型	2018 個人蔵
98.	ミミズク	55×70×55	型	2018 個人蔵
99.	ふ尽しの福助(黄)	69×65×45	型	2018
100.	ふ尽しの福助(青)	67×65×45	型	2018
101.	ふ尽しの福助(緑)	60×63×40	型	2018
102.	イノシシ(茶)	85×43×47	型	2018
103.	イノシシ(赤)	45×42×85	型	2018
104.	イノシシ(白)	45×38×85	型	2018
105.	作者の分身	118×150×102	手	2018
106.	豆ライオン	28×35×38	手	2018 個人蔵
107.	豆ゾウ	43×39×28	手	2018
108.	豆カバ	30×24×43	手	2018
109.	豆クマ	20×27×17	手	2018 個人蔵
110.	豆だるま	20×25×20	手	2018 個人蔵
111.	豆だるま	23×28×22	手	2018 個人蔵
112.	姫だるま	23×30×22	手	2018 個人蔵
113.	デザインヒゲだるま	38×62×35	型	2018
114.	わさび	38×29×40	手	2018
115.	大根おろし	40×29×31	手	2018
116.	からし	38×29×36	手	2018
117.	バツケ	42×53×39	手	2019
118.	子ふくろう	38×64×40	型	2019
119.	タコ	45×74×45	型	2019
120.	鯉乗り童子	52×65×102	型	2019
121.	くまったクマ(茶)	55×94×63	型	2019
122.	招き猫(白)	71×103×68	型	2019
123.	鬼面福助(青)	82×81×55	型	2019
124.	鬼面福助(赤)	88×75×50	型	2019
125.	豆腐小僧	80×76×57	型	2019
126.	カツオの殿様	83×62×89	型	2019
127.	カツオ武士	82×88×60	型	2019
128.	うつわモドキ・壺(青)	10×68×108	手	2019
129.	うつわモドキ・茶碗(クリーム)	100×70×102	手	2019
130.	うつわモドキ・茶碗(赤)	98×58×95	手	2019
131.	うつわモドキ・茶碗(赤)	118×61×110	手	2019
132.	うつわモドキ・湯呑み(薄灰)	78×90×80	手	2019
133.	うつわモドキ・茶碗(黄)	100×78×98	手	2019
134.	うつわモドキ・壺(空色)	140×170×150	手	2019
135.	トントンカ士	46×35×22	手	2019
136.	トントンカ士(金)	39×34×25	手	2019 個人蔵
137.	フーフーだるま	58×72×50	型	2019
138.	招き猫(黒)	80×100×65	型	2019 個人蔵
139.	ユーレイ	48×92×50	型	2019
140.	カッパ	50×60×55	型	2019
141.	おもしろくん	30×86×40	型	2019
142.	シーツお化け(黒)	50×80×50	型	2019
143.	シーツお化け(緑)	50×75×48	型	2019
144.	シーツお化け・裸足	50×76×48	型	2019
145.	たこけし	130×335×115	手	2019

真坂人形

2019年11月3日 初版第1刷発行

企画 NPO法人アーツセンターあきた

取材・編集 高橋ともみ

デザイン 越後谷洋徳

印刷 株式会社プリントバック

発行 NPO法人アーツセンターあきた

〒010-1632

秋田県秋田市新屋大川町12-3

秋田公立美術大学アトリエももさだ内

TEL 018-888-8137

FAX 018-888-8147

Email info@artscenter-akita.jp

Web <https://www.artscenter-akita.jp/>

© Arts Center Akita Ayumu Masaka

ISBN978-4-600-00283-1

Printed in Japan

本書の内容を無断で複製・転写・放送・データ配信
することを禁じます。